

## 新島村博物館

### 「研究紀要」・・・・調査・研究活動

#### 「式根島の唐人津城の泥質層から推定した小池と水系の変遷」

新島村博物館館外研究協力委員 磯部一洋  
元（財）産業技術総合研究所研究部長

#### 国指定重要無形民俗文化財「新島の大踊」の現状と課題

新島村博物館 学芸員 北村 武

調査・研究活動「研究紀要」

## 式根島唐人津城の泥質層から推定した小池と水系の変遷

新島村博物館 館外研究協力委員 磯部一洋

### 1. はじめに

伊豆諸島には三宅島南岸付近に大路池たいろいけと旧新 濞池しんみょういけなどの湖沼跡、神津島天上山頂てんじょうさんに不動池ふどういけ・千代池せんたいいけなどの小さな沼池しやうちがある。新島村の新島と式根島にも、大小の水溜まりが降雨後に出現するが、その大部分は短時間に干上がる。

式根島西端にある隈くまの井いにできる池（図1のA参照）は、現在沈積泥が分布して、降雨後に湛水するだけとされる（東京都土木技術研究所、1967）。一方、近くの唐人津城とうじんづしろには隈の井より大きな裸地が広がるが、池や湛水に適した凹地は見当たらない。しかし、水底に沈積する泥を挟む厚さ4m以上の堆積物が、地質探索会（東京七島新聞社、2011）に關連し、景勝地の後方で初めて観察された（図1のB参照）。

本稿では、唐人津城の小さな水路跡付近に見つかった泥質層と水系区分結果から推定した小池しやうち（沼池）とその変遷について述べる。

### 2. 式根島の地形地質の概略

#### 2.1 地形

新島の南西3kmに位置する式根島は東西3km、南北2.5km、面積3.6km<sup>2</sup>の小さな火山島である（図1）。最高点は唐人津城にある109mで、島の西側から東側へ高度を低下させつつ、溶岩の高まり（小丘）が南北方向や沿岸（外縁）部に認められる。

式根島の周囲は12.2kmと面積に比べて長く（磯部、1984）、著しく屈曲したリアス式海岸によって取り巻かれる。その中で、小さな弧状の湾入部は二次噴火に伴う火口跡とされ（伊藤・谷口、1996）、大浦・泊いししろかわ・石白川などに石英・黒曜石・軽石質の白い砂浜（北村ほか、2003）が分布する。南岸なんしやの足付あしづきと地鉦ぢなには、著名な温泉が溶岩の割れ目から湧出し、海中温泉が御釜湾内に時々目撃され、熱水・噴気活動の痕跡が所々に認められる。

#### 2.2 地質

式根島の形成は縄文早期後半の遺跡を載せることから7,000年前より古く（一色、1987）、更新世末の1.4万年前頃まで遡る（伊藤・谷口、1996）

この島は石英と黒雲母の斑晶が目立つ黒雲母流紋岩質の単成火山からなり、村内最大の

溶岩円頂丘をなす（大島、1999）。9世紀に新島北部と南部でそれぞれ噴火した阿土山と向山（新島村博物館、2010）に比べて古いため、円頂丘の浸食がより進行しているものと予想される。

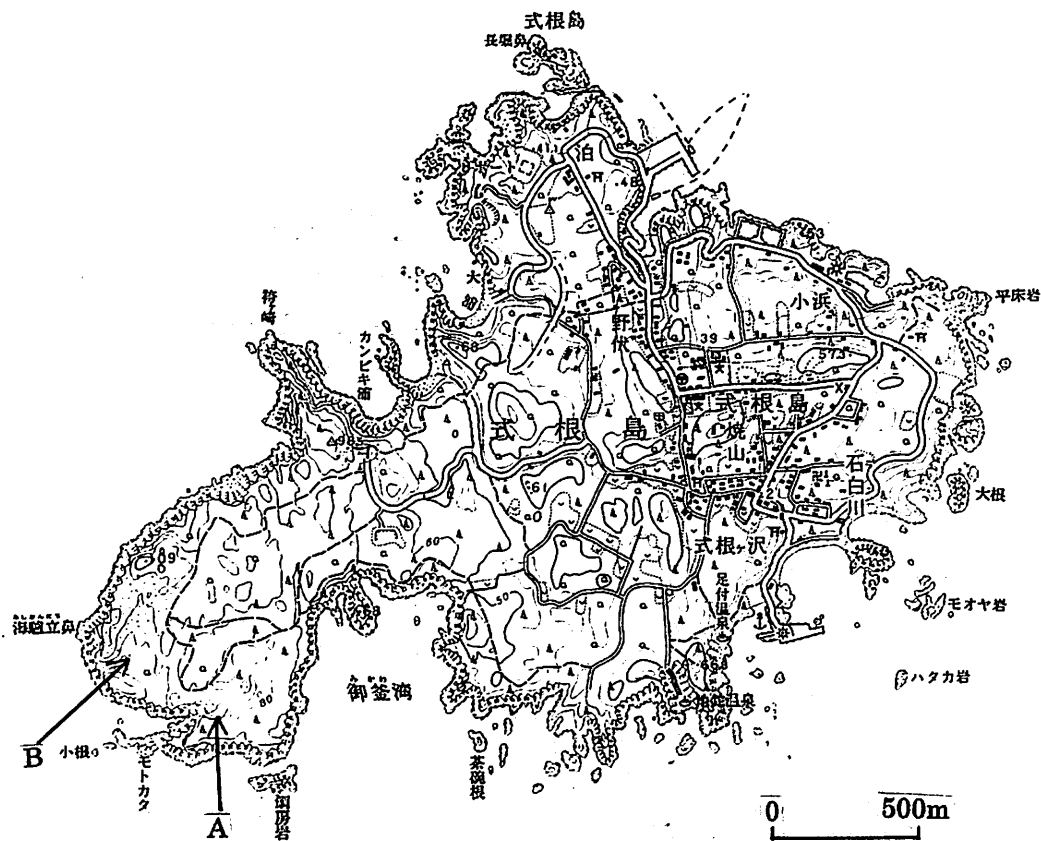


図1 式根島の地形と位置関係 国土地理院2003年発行の2.5万分の1地形図「式根島」「新島」に追記した

A：隈の井にできる池 B：唐人津城の露頭

溶岩の主噴出位置が想定される御釜湾西側では、溶岩の厚さが少なくとも109m以上に達し、円頂丘の表層部は白色の塊状・軽石質溶岩、下方（内部）へやや緻密な黒曜岩質溶岩、さらに灰白色の結晶質溶岩に変化する。

これらの溶岩や二次噴火に伴う火砕物は、西暦838年に噴火した神津島天上山、886年の新島向山から飛来した4m以下の火山灰層（後者が厚い）に覆われる。この火山灰層は、円頂丘の低所（凹地）でやや厚くなり、高所（小丘）でより薄いか欠層する。なお、本層には海浜砂に多い石英が含まれている。

### 3. 式根島の水系とその特徴

小さくて低い式根島はスダジイやクロマツなどの樹木に被われ、降水が<sup>れっか</sup>裂罅水として地中へ徐々に浸透して（磯部、1996）、常流する河川は存在しない。しかし、分水界（嶺）内の一部では降雨後に集水し、小さな水流が裸地や人工改変地などで一時的に見られる。なお、水系に関連した地名として、本島東側に式根ヶ沢や大野沢がある。

新島本村役場複成による東京都地形図「式根島」（1967年6月測図、縮尺2,500分の1）を用いて、全島の水系区分図を作成した（図2）。さらに、主要な25水系に係わる集水面積・分水界の最高高度・下流域の地形について取りまとめたのが表1である。総面積約360ha（3.6km<sup>2</sup>）の大半が区分されているが、残りの20%未満（図2の無番号の陸域）は、規模のより小さな水系からなる。

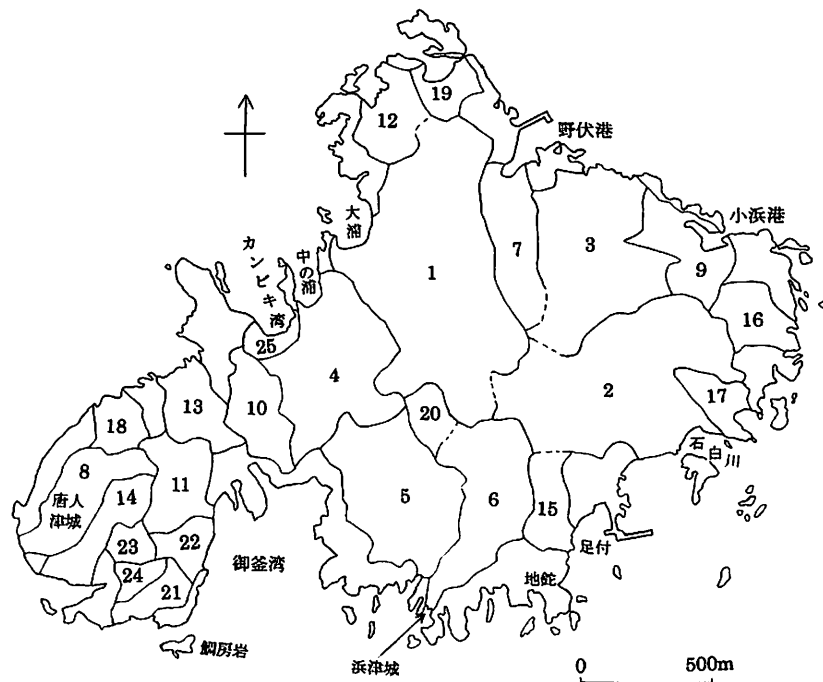


図2 式根島の主要な水系区分図 実線は分水界の明瞭なもの、破線は谷中分水界などとして不明瞭なものを示す。水系番号（1-25）は表1参照

集水面積の最大は、島の中央部を占める大浦水系（図2・表1の番号1）の51.8haで、石白川水系の38.8ha、大野沢水系の26.2ha、中の浦水系（同4）の23.1haと続き、小さな湾入部しか持たない大野沢水系を除き、砂浜がいずれも発達する。一方、カンビキ浦（水系番号25）と泊（同19）は二次噴火口に当たり、集水面積が2.1haに4.0haと小さく、外海にやや開いた前者が礫浜、より湾入した後者が砂浜になっている。

表1 式根島における水系特性

番号	水系名	集水面積 (ha)	分水界の最高度 (m)	下流域の地形
1	大浦	51.8	69	砂浜
2	石白川	38.8	62	砂浜
3	大野沢	26.2	58	岩石海岸
4	中の浦	23.1	85	砂浜
5	浜津城西	22.2	75	海食崖
6	浜津城	17.3	65	海食崖
7	野伏	12.2	55	漁港 (旧砂浜)
8	唐人津城	9.7	109	海食崖
9	小浜	8.5	56	漁港 (旧砂浜)
10	神引南	8.4	99	閉塞
11	御釜湾西	8.2	96	海食崖
12	吹之江	7.4	47	礫浜
13	神引南西	7.2	92	海食崖
14	唐人津城東	7.1	94	海食崖
15	足付	6.7	60	礫浜
16	小の口公園	6.1	53	礫浜
17	丸根ヶ浜	4.1	49	礫浜
18	唐人津城北	4.1	96	海食崖
19	泊	4.0	47	砂浜
20	野鳥の小道東	3.7	62	閉塞
21	鯛房岩対岸	3.6	91	海食崖
22	御釜湾南西	3.6	88	海食崖
23	隈の井北	2.4	94	閉塞
24	隈の井	2.1	94	閉塞
25	カンビキ浦	2.1	82	礫浜

式根島ではカンビキ浦や御釜湾内のように分水界が海側に偏り（高まり）、しかも海食による急斜面に縁取られた小さな水系（表1には未掲載）が多い。その高まりは、粘性の大きな流紋岩質の溶岩円頂丘に共通して認められる特徴であり、新島の宮塚山・赤崎峰の両火山でも円頂丘の外縁部がより高まっている（図3）。

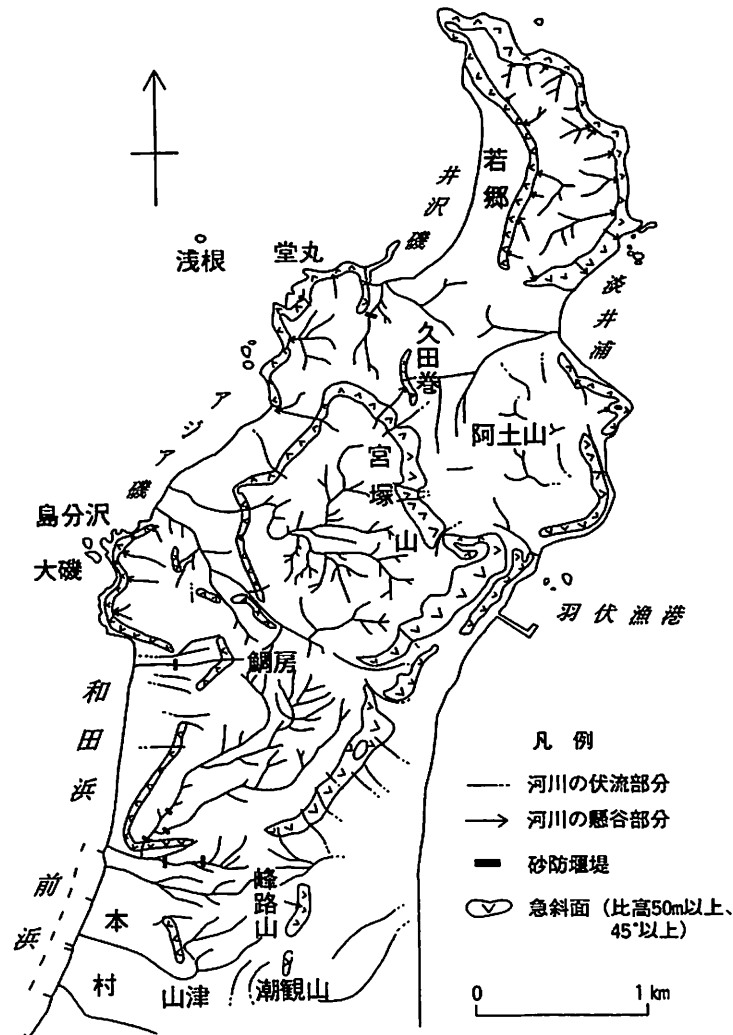


図3 新島中北部の水系図（磯部、1996） 本島の小河川は渇水期にすべて干上がる。赤崎峰は鯛房から峰路山へかけて広がる単成火山

#### 4. 小池と水系変化に関する検討

##### 4.1 裸地化に伴う土砂の流出

唐人津城にある島内最大の裸地（写真1）が、森林内部まで広がることから、風送塩や強風だけが植物の枯死や生育障害を引き起こしたとは言えない。むしろ、唐人津城・<sup>カスツ</sup>神引・隈の井に露出した溶岩に赤褐色の高温酸化帯が認められるため、旧熱水・噴気活動が各地点の裸地化に大きく影響した可能性が高い。

いったん裸地化すると、化学的風化以上に物理的風化が作用して溶岩が細片化し、土砂の生産がより加速される。現在、唐人津城には白っぽく見える水流跡があり（写真1）、大雨後に土砂が海域へ流出する。

## 4.2 小池の推定

### 4.2.1 泥質層の露出状況

唐人津城の集水域（水系番号8）は、最高地の独標点（109m）から懸谷部分をなす海食崖（図6参照）へかけた9.7haである。その集水域の標高59m付近において、水流跡の左岸側に高さ4m以上の西向きの露頭があり（写真2）、陸水底に沈積したと推定されるシルト（粗粒な泥）と微粒砂の水平葉理からなる泥質層がその中央部約2mに発達する（図4）。写真3からは、微粒砂に続きより細かいシルトが長期間にわたって繰り返して沈積した様子が確認できる。



写真1 唐人津城後方の谷底部に広がる小さな水流跡  
海への流出口は写真右奥。矢印は写真2・3の露頭（図5のa）の位置を示す



写真2 攻撃斜面側に露出した地層（3m長の標尺部分）  
矢印は写真3の撮影個所を示す



写真3 泥質層の近接写真

矢印付近の黒く細い縞は炭質物入りの砂層。スケールは75cm

図4は露頭における観察結果を示したもので、下部から上部へほぼ連続（整合）的に堆積している。そして、露頭の最上部を中心に砂礫層に変化し、角の取れた亜角礫や亜円礫もあり、流水下で形成されたことが分かる。ただし、礫径は20cm以下で、5cm前後のものが多い。

上述した厚さ約2mの泥質層は、写真4に示す限の井の池底に沈積しつつある白い泥に酷似する。このことから、小池が以前に唐人津城にも存在し、その形成には長い時間を要したことが推定される。今後、泥質層の薄い砂層に少量含まれる炭質物〔図4の-1mと-2m付近（写真3参照）〕について、 $^{14}\text{C}$ 年代測定が実施されれば、泥の堆積速度や泥質層の形成年代が明らかになるであろう。

#### 4.2.2 小池の広がり水系変化

現在、唐人津城の海側（外縁部）の高所と露頭（図5のa）間は浅い小谷をなし、土砂が流下する際に攻撃斜面（左岸）側でより浸食され、低い崖が上下に分かれて形成されている。また、その北（上流）側50mと南側40mのほぼ同じ高さに黄橙色の泥質砂層が小規模に露出し、最盛時における湛水域の範囲を示す。



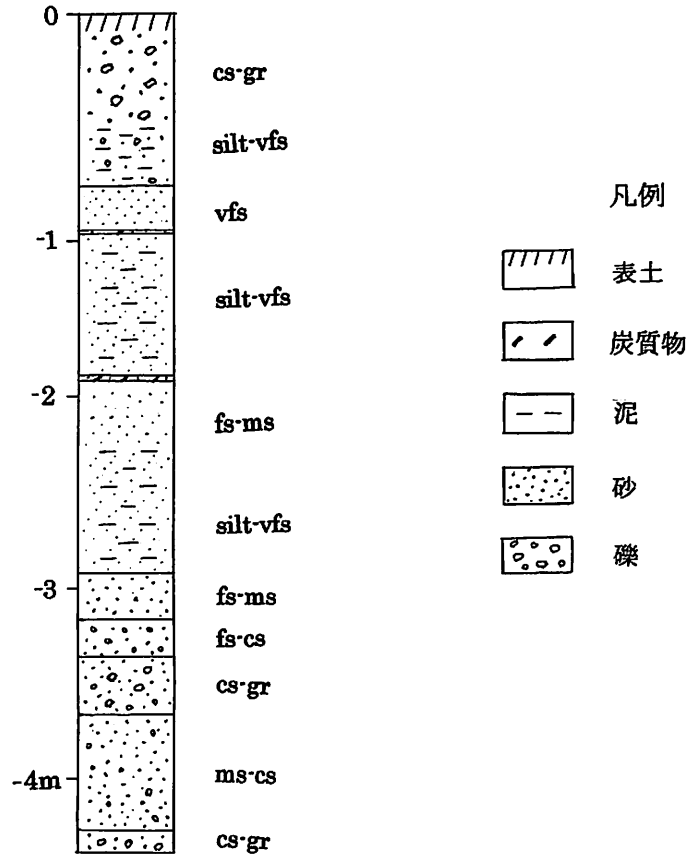


図4 唐人津城後方における地質柱状図

最上部の推定標高は63m、表土付近に9世紀の火山灰は確認できない

silt:シルト (泥) vfs:微粒砂 fs:細粒砂 ms:中粒砂 cs:粗粒砂 (含極粗粒砂)

gr:角礫

露頭東側には、照葉樹に被われた平坦地が64.1mの独標点を中心に広がる (図5)。仮に泥質層がそこで確認されれば、小池がより東側まで拡大していたことになる。

最盛期以降、1) 海側の高まり (図6の矢印) 部分が海食により低下され、2) 流出口ができ、3) 小池の消滅後に、4) 泥質層の一部が露出したとする水系の変遷が考えられる。図6は小谷の縦断形に、旧水面高度と高まりの浸食部分などを併記した概念図である

#### 4.3 新島の溶岩円頂丘における水系発達の違い

新島村最新の向山とそれより古い式根島は、ともに黒雲母流紋岩質の大きな溶岩円頂丘からなる。しかし、式根島は向山を200m程度低下させ、海に囲まれた状態にあり、溶岩に先駆けて噴出した火砕丘堆積物などはすでに浸食されて確認できない (大島、1999)



写真4 隈の井に降雨後に出現した小さな池（矢印部分）  
遠景の海側部分が若干高まり、火口状の凹地をなす

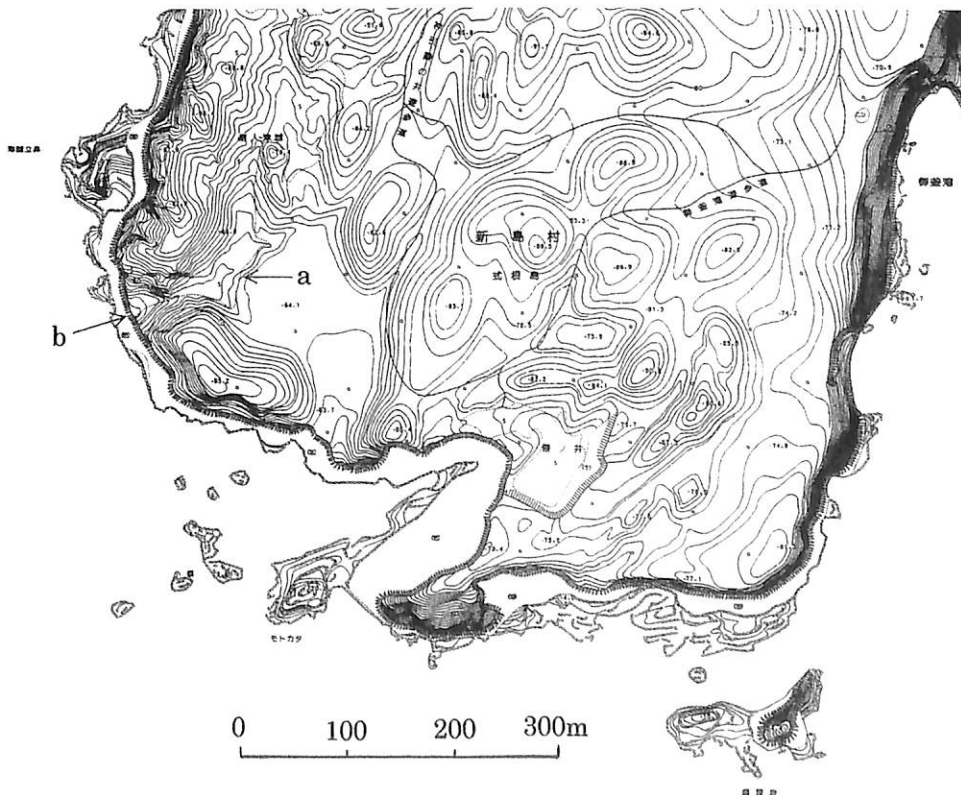


図5 唐人津城およびその周辺の地形（2009年発行の縮尺2,500分の1東京都地形図）  
aは地質柱状図作成の露頭、bは水流の出口付近の海食崖の位置をそれぞれ示す

新しい向山の溶岩円頂丘（図7）には、丹後山に代表されるプレッシャーリッジである溶岩の高まり（小丘）と火口状の低まり（凹地）が多数存在し（磯部、2007）、水系（河川）は阿土山（図3参照）同様に発達しない。なお、図7では円頂丘に加え、原形を留めた火砕丘と大きく開いた複数の火口（磯部、2011）が大峯付近に見られる。

これに対して、古い式根島では円頂丘の浸食がより一層進み、流出口のない閉塞性水系から海へ直接流出する開口性水系へ変化したものが多い。先述した唐人津城に加え、はまづしろ浜津城（水系番号6）・浜津城西（同5）・御釜湾西（同11）などがそれらに含まれる。今後の浸食によっては、隈の井でも開口性水系への移行や泥質層の露出が予想される。

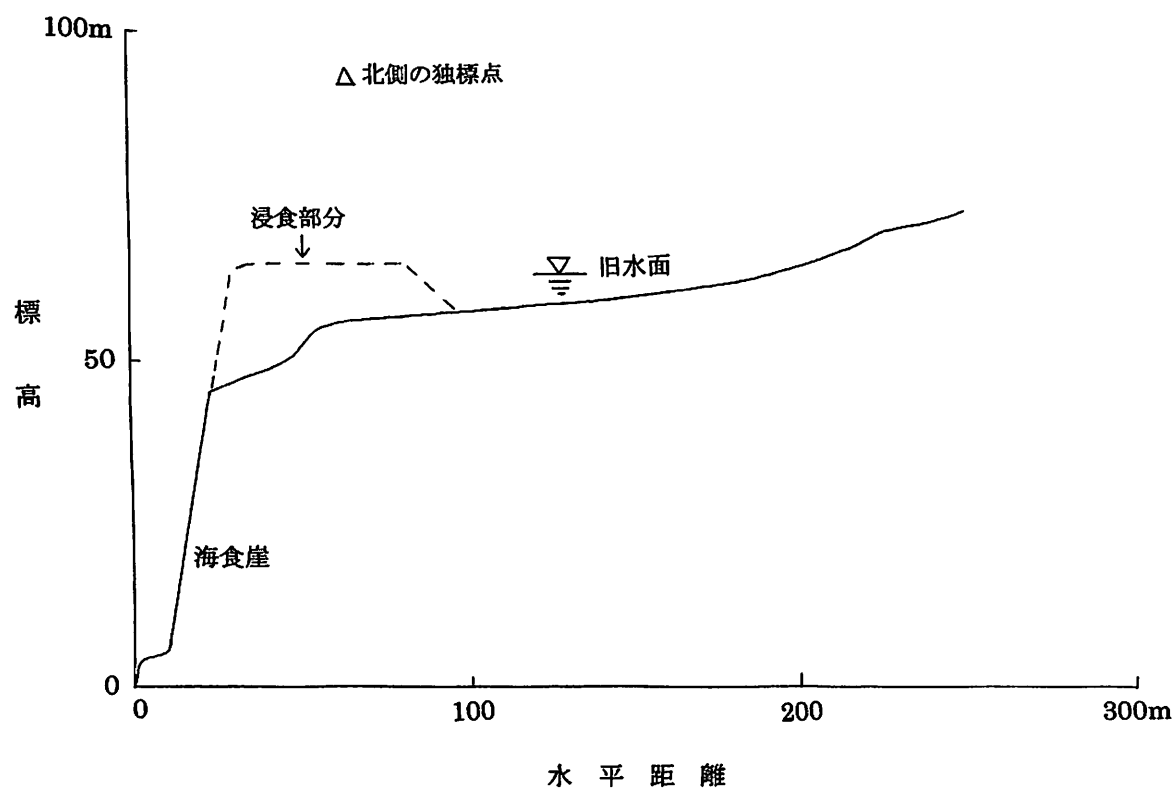


図6 裸地を刻む小谷の縦断面形  
浸食部分（流出口付近）は塊状・軽石質溶岩からなる

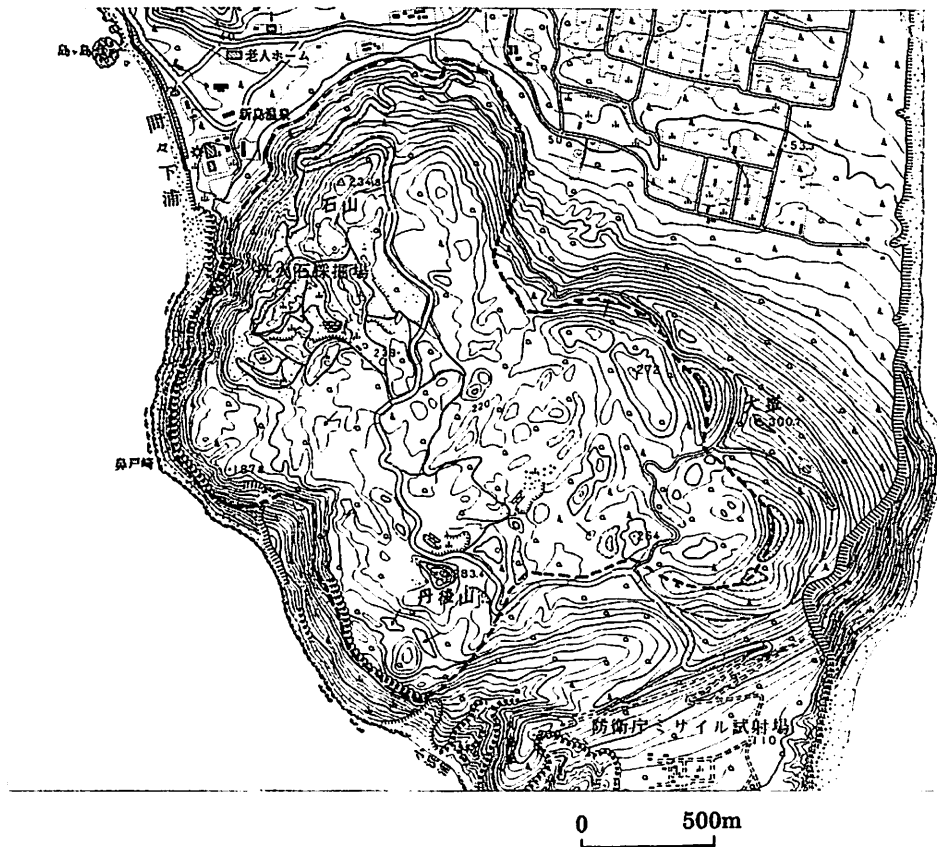


図7 新島南部の向山に見られる新しい火山地形  
2.5万分の1地形図「新島」に、円頂丘溶岩の分布範囲(太い破線)などを追記した

## 5. おわりに

式根島西端の唐人津城に見つかった泥質層と水系区分図から、小池の形成過程や水系変化などは以下のとおり推定される。

- 1) 唐人津城では旧熱水・噴気活動によって大規模に裸地化し、土砂の生産が以前から活発であった。
- 2) 海側の高まりによって閉塞された水系で、厚さ2mもの泥質層が長期間にわたり形成された。
- 3) 高まりの一部が浸食・低下されて流出口ができ、開口性の水系の下で小池が消滅した。
- 4) 式根島は向山に比べて古い火山のために溶岩円頂丘の浸食が進み、閉塞性から開口性の水系へ変化したものが多い。
- 5) 石白川・大浦・中の浦に砂浜が見られるのは、石英などを含む土砂が砂の留まりやすい湾入部に多く流入するためである。

## 謝辞

小論の作成に当たり、新島村建設課から地形図類の提供を受けた。また、新島村商工会からは現地調査の機会を、式根島観光協会からは現地調査への支援をそれぞれ頂いた。記して謝意を表します。

## 参 考 文 献

- 一色直記 (1987) : 新島地域の地質. 地域地質研究報告 (5万分の1地質図幅), 地質調査所, 85p+地質図.
- 磯部一洋 (1984) : 伊豆諸島における砂礫海岸の発達の違いについて. 日本地理学会予稿集, (26), 64-65.
- 磯部一洋 (1996) : 地勢. 新島村史通史編 (1168p), 新島村, 1-40.
- 磯部一洋 (2007) : 地形図と写真による新島村の地形地質の紹介-地学関係展示説明資料として-. 新島村博物館平成17年度年報, 59-83.
- 磯部一洋 (2011) : 新島の火口に関する文献と火口類似地形の紹介-地学関係展示説明資料Ⅱとして-. 新島村博物館平成22年度年報, 28-49.
- 伊藤順一・谷口宏充 (1996) : 式根島流紋岩質溶岩流にみられる二次火口と放出物. 火山, 41 (4), 171-179.
- 北村 武・有田正史・磯部一洋・須藤定久 (2003) : 新島・式根島の白い砂. 地質ニュース, (582), 19-35.
- 新島村博物館 (2010) : 平成20年度新島村博物館企画展新島村の道その形成と自然条件. 新島村博物館平成21年度年報, 3-37.
- 大島 治 (1999) : 伊豆諸島火山誌5 式根島. ご神火-伊豆大島火山博物館通信-, (7), 6-7.
- 東京七島新聞社 (2011) : 式根高原地質探索会を開催「泥層」を初見学. 11月28日号 (2130).
- 東京都土木技術研究所 (1967) : 新島村式根島・地下水調査報告 (昭和40年9月). 地質・地下水報告集 (昭和40年度), 都土木技研資料, (41-8), 25-41.

## 国指定重要無形民俗文化財「新島村の大踊の現状と課題」

新島村博物館 学芸員 北村 武

### 1. はじめに

大踊は室町時代後期に流布した「風流踊り」であり、中世の色を残す古い芸能である（日本民俗芸能協会）。江戸時代初期に全国規模で流布したとされる大踊は、今では伊豆諸島の新島にしか残されていない。

平成17年2月に文化庁から重要無形民俗文化財の指定を受け、本村と若郷に結成された保存会を新島消防団、新島村教育委員会（新島村博物館）の関係者が支えて来た。

大踊の歴史的経緯を見ると幾度も存亡の危機に瀕して来た。昭和時代の長い休止期を経て平成4年に本村がまた平成6年には若郷が東京都民俗芸能大会への招待公演をするのに伴い、両地区に大踊保存会が結成され、毎年盆祭で公開し、保存継承されている。

本報告では、筆者がこれまで新島村教育委員会と新島村博物館で長年携わって来た社会教育とりわけ民俗芸能である大踊の現状と直面する課題について述べる。

### 2. 文化財指定までの経緯と歴史的背景について

大踊は現在本村と若郷に伝承され、両地区での大踊は歌や踊りに違いが見られるが、島の北部に位置する若郷は、元禄16年（1703）に新島を襲った大地震、大津波により、北部の地へ移住を開始した。宝永8年（1711）には本村北村の一部住民が若郷を開村して移住したという記録がある。従って大踊が伝えられた時代は本村も若郷も同時期で芸態は同じであったことが推察できる。



本村大踊



若郷大踊

平成3年以降、日本民俗芸能協会の及川陵一研究部長が、全国の盆祭や芸能を調査して来たが、「大踊」という芸態はどこにも見当たらないことがわかった。伊豆諸島の新島で保存継承されて来た経緯は重要であり、今の芸能を記録に留めておかなければならないと言ひ、さっそく新島へ来島され、根拠資料を探るだけでなく、実際現地の保存会の関係者たちに話を聞き、音や手様の手ほどきを受けながら踊り、歌と踊りの師匠たちにインタビューをして音と踊りを細かく分解した。また、当時踊っていた役員や会員の写真撮影をしている。現地での詳細な記録を平成11年度に文化庁の助成により、「民俗芸能現地習得調査報告書」としてまとめた。この報告書では現在残っている歌と踊りの音や手様が詳細に記録されている。

平成15年（2003）には日本民俗芸能協会主催・新島村教育委員会共催による民俗芸能おもしろゼミナール・東京ふるさと「新島の芸能」大踊が千代田区カスケードホールで開催された。コーディネーター（司会進行）は日本民俗芸能協会・芸能学会会長 三隅治雄、パネラーは国立歴史民俗博物館名誉教授 小島美子、日本民俗芸能協会研究部長 及川陵一、新島村博物館 北村 武、実演 若郷大踊保存会 前田栄次郎、宮川一郎、前田寿夫、磯部健造（敬称略）が招待を受け、パネルディスカッションに加わった。

「大踊は本村・若郷に伝わる小踊風の風流で、東京都指定の無形民俗文化財である。妻折笠に「カバ」と呼ばれる紫や赤の布をぐるりと垂らし、着流しの背に長い下げ緒の異様な扮装で、囃子はなく歌のみで踊る。波のうねりのようにゆったりと流れる大踊の動きは、産字を長くのばし朗々と響く歌に和し中世の古風を偲ばせるものである。」と三隅治雄氏は大踊の様態を説明した。歌の専門分野からは小島美子氏が大踊は中世を感じさせる素晴らしい歌であることを確認した。途中所要で退席せざるを得なかった小島美子氏が会場を後にするとき、前田栄次郎氏は伊勢音頭の歌で見送った。即興で出たものであり、会場の参加者からは物悲しい雰囲気の中で大きな拍手が沸いた。会場には文化庁の担当者も見えていた。

筆者はパネラーとして参加したが、新島で事前に用意した島の概要を8分間にまとめたビデオを紹介した後、アンケート調査を公表した。大踊の実演は前田寿夫と磯部健造の両氏が「青が丸」を公開した。

本村と若郷の大踊を詳細に分析して行くと、歌や踊り方に相違する点が見られる。しかし、踊りの手様には、「かかえ扇」「すくい出し」「突き扇」など共通する手様が見られる。

本村の「役所入踊」は元来、48分ほどかけて踊ったとされる芸態を短く省略している。駆け出し部分と最後の踊りで構成されているが、最後は「長者踊」として「役所入踊」から切り離して公開している。「長者踊」そのものは「役所入踊」の最後の手様になる。これは本村大踊が昭和4年に日本青年館へ招待公演を依頼された際に、長すぎることで短縮して公開したことから現在の形になったと言われている（故人大沼朝一翁）

島の北部に位置する若郷は原町北村集落に居住していたが、元禄16年（1703）に新島を

襲った大地震、大津波により、一部住民が若郷の地へ移住を開始したとされている。宝永3年（1706）は北村地区の地震による崖崩れで家屋が倒され、人畜の死傷等があったために移住したとも伝えられている。宝永8年（1711）には若郷を開村したという記録が見られる。

歴史的な見地からして、本村も若郷も同時期に大踊を受け入れていたことが推測できる。本村大踊は、消防団を取り仕切る「儀式」が残っていて貴重である。これについては新島村空港消防係が詳細にまとめて毎年配布しているのでここでは省略する。かつて若郷村にも消防団が取り仕切る「儀式」があった。消防団の規模縮小と時代の趨勢<sup>すうせい</sup>に押されて消えた経緯がある。

大踊の歴史的経緯を見ると幾度も存亡の危機に直面している。

以下に大踊に関する年表を掲げる。

#### 大踊関連の年表

- |  |  |   |
|--|--|---|
| 室町時代後期から江戸時代初期                           | 風流踊として流布しはじめる  | その後大踊へ  |
| 元禄16年（1703）                              | 元禄地震   | 原町北村が被災し、北部の地へ移住を開始する                             |
| 宝永8年（1711）                               | 若郷開村   | 本村に居住していた北村集落住民は若郷へ宗教的行事及び大踊などを含むすべての生活様式を移動して行った |
| 寛政10年（1798）                              | ごろ「伊豆七島風土細覧」（三島勘左衛門著）  | に大踊に関する事柄が記載される                                   |
| 明治22年（1889）                              | 本村住民の4家族（梅田弥五右衛門・植松七郎・山本定吉・植松竹松）                                 | が式根島へ移住   |
| 明治39年（1906）                              | 若者仲間廃止   |   |
| 大正4年（1915）                               | 若郷で青年団に改称（旧若者仲間）   |   |
| 大正9年（1920）                               | 本村で青年団に改称（　　〃　　）   |   |
| 大正10年（1921）                              | 式根島で青年団に改称（　　〃　　）  |   |
| ※ 参考：式根島では明治26年・27年ごろ大踊を教わり、昭和10年ごろまで続いた |  |   |
| 昭和3年（1928）                               | 新島・前田金八郎の論文「民俗藝術」  | に掲載   |
| 昭和4年（1929）                               | 本村の大踊・東京・日本青年館   | で招待公演実施   |
| 昭和8年（1938）                               | 若郷大踊   | が消防団により復活した                                       |
| 昭和16年～20年（1941～1945）                     | 第二次世界大戦  |   |
| 昭和32年（1957）                              | 東京都文化財総合調査実施   |   |
| 昭和33年10月                                 | 新島（本村・若郷）の大踊、東京都より無形民俗文化財へ指定される                                  |   |
| 昭和53年                                    | 若郷妙蓮寺落慶式で大踊を公開する。20年間の空白の中で師匠クラスの古老たちが他界したことによって辛うじて公開できたのは「伊勢踊」 |   |



だけであった。

昭和60年2月	本村大踊・東京都民俗芸能大会への招待公演実施
平成4年	本村長栄寺落慶式 盆祭として復活・継続（本村）
平成6年	若郷大踊保存会の猛練習、東京都民俗芸能大会へ招待公演実施
平成3年～平成10年	及川陵一（日本民俗芸能協会研究部長）民俗芸能調査実施
平成7年～平成9年	新島村博物館建設準備期間（多忙を極める）
平成10年7月	新島村博物館開館 開館式典開催～大勢の来賓が出席
平成11年	民俗芸能現地習得調査報告書の刊行
平成16年10月	日本青年館にて招待公演実施（若郷大踊保存会） 大踊が日本の4大芸能のひとつとして参加、絶賛を受けた
平成17年2月	新島（本村・若郷）の大踊、国（文化庁）の重要無形民俗文化財に指定される
平成22年	若郷大踊、江戸東京博物館へ招待公演実施

### 3. 大踊の保存組織について

本村大踊は、昭和60年2月に東京都民俗芸能大会への招待公演を受け出演するに伴い、大踊保存会が結成された。故人大沼朝一翁の私邸へ有志が集まり、踊りの稽古をはじめた。忘れていた大踊をみんなで学び、見事に復活を果たした。この時の勢いはすさまじいものがあったと言う。

若郷大踊は妙蓮寺落慶式を契機に保存会が生まれ、音頭を担当した故人磯部弥助氏、前田栄次郎氏はテープに録音されていた歌を手掛かりに稽古を積み重ね、難曲を復活させた。踊りは宮川一郎氏の努力により復活を果たした。宮川一郎氏は戦後復活した盆祭のリーダーを務めた。

こうした取り組みが、本村では長栄寺の落慶式の大踊公開（平成4年）で結実した。以後現在に至るまで毎年盆祭で公開している。

若郷では東京都民俗芸能大会（平成6年）への招待公演を機に、連続50日以上に及ぶ猛練習を繰り返して臨んだ。故人山本清司教育長（当時）は仕事を終えてから、毎晩若郷へ通い詰め、自らも率先して踊った。練習段階では踊り手は13人以上に増えて行き、継承発展の礎になった。平成7年以降は、本村同様若郷においても毎年盆祭で一般公開している。

新島の大踊の復活は、日本民俗芸能協会及び民俗芸能学会の三隅治雄氏、及川陵一氏らの地道な調査と熱い思いにより復活を果たしたことを忘れてはならない。

### 4. 大踊が新島へ残された背景について

新島の大踊に似た芸態を持つ特徴的なものとしては、飛驒宮村に伝わる「ひなみやうら神代踊しんしろおどり」や大

阪の「住吉踊」<sup>すみよしおどり</sup>が挙げられる。大踊保存会の役員がその映像を見ると、衣装や踊りの手様、音など微妙に異なるという。種子島に伝わる「大踊」も新島の踊りとは異なる。

大踊の歌詞は内容から見て、恋歌が多い。本村は真言宗から日蓮宗へ改宗されてから信仰心が強くなり、墓前には生花が絶えず、白い砂で清められている。墓前には毎朝必ず供え物を持って通う人々が大勢いる。かつて盆祭になると村中の人々が長栄寺境内へ集まり、「大踊」を見た。今でも墓前へ生花や水を供えた島の人々は帰宅する途中ダントウ（墓）桶を持ったまま、「大踊」や「小踊」を見て家路へ急ぐ。ある新島の老婆は言った。「まるで亡くなったいんじー（おじいさん）が踊っているようだよ。」と。

「大踊」は江戸時代初期に全国的な規模で流布した風流踊であると言われている。現在その芸態が残っているのは、伊豆諸島の新島だけであると言ってよい。ではなぜ「大踊」は新島へ残ったのか。根拠資料がほとんど残されていないため、明確なことはわからない。盆は死者の魂が降りてくる。その魂を歌って、踊りながら慰めてあげようと「供養するための踊り」へ変遷して行く過程で、継承されて来たのではないか。

以下に掲げるのは、「伊豆七島風土細覧」<sup>いず七島ふうどさいらん</sup>（三島勘左衛門著）による記述である。

「14日、15日の両日は島の若者ども御役所の大庭に集まり、大踊とて凡そ3百余人一様に菅笠を冠り、笠の端に五尺の絹を垂れ、顔を隠して住吉踊のごとく手に扇を持ちて謳いつれて踊る。古代の規式にて16段のふし事あるよしなれども面白き事はすべてなし。この隙間に小躍りとて12、13歳なる子ども30人ばかり網笠着て踊る。これは少し面白き方、唱歌も手振りも遥かにまされり。間々に葉狂言もする。流人に芸者あるゆえそれを師として年々稽古するなり。16日17日の両日は大寺の庭にて踊る同じようなり。かようなる時は島中の女ども例の紅の鉢巻きして四方の垣根に稲麻のごとく打圍見物するなり。」とある。

盆は日常の労働から解放され、島の若者たちにとって、この上ない娯楽の場であり、憩いのひとときであった。また盆は先祖供養のため祈りの時間を大切に作る場であった。大踊は寺の境内へ廓をつくって踊る。踊り手たちは先祖の霊を慰めるため夢中で歌い、踊ったと言われている。村中の若者が毎夜練習へ参加し、歌い手も踊り手も師匠による厳しい選別があったからだ。

風流踊りから盆の供養踊りへの変遷をたどることにより、大踊は新島の人たちに継承されて来たことが推察できる。

## 5. まとめと課題

大踊の歴史的経緯については根拠資料が少ないため明らかにはなっていない。上木甚兵衛は飛騨（岐阜県）高山の名主で大原騒動（領民救済運動）に加担した罪で新島へ流され、安永4年（1775）～寛政10年（1798）85才で病死している。流刑制度が伊豆諸島へ敷かれたのは寛文8年（1668）である。実父上木甚兵衛の看病のために新島へ渡った三島勘

左衛門氏は在島中著わした書「伊豆七島風土細覽」の中で江戸・寛政年間に「流人の中に芸者がいて大踊を指導して伝えた。」と記述している。大踊が流布した江戸初期に、新島で大踊を踊っていたと書かれた冊子もある。江戸初期に流行した大踊をいち早く新島へもたらし、普段過酷な労働に従事していた若者たちがささやかな楽しみとして踊っていたことも考えられるが、大踊が新島へいつごろ伝えられたかを明確に示す根拠資料はない。

また、この踊りが「室町時代後期から江戸時代初期に流布した風流踊りであることは間違いない。」と日本民俗芸能協会および民俗芸能学会では述べている。不明確な部分が多いことと、芸態習得の困難さなど様々な要因はあるが、今日、大踊の保存継承は極めて困難な状況にある。

それは本村、若郷両村に共通しているが、若郷は平成6年、東京都民俗芸能大会へ招待された出演を契機に六本木自主公演、平成16年に日本青年館への招待公演、平成22年の江戸東京博物館招待公演等を経て、保存会がしっかりと活動しながら、歌と踊りが継承されている。

本村の課題は、歌である。公開時、最初に踊る「役所入踊」は特にテープレコーダーの音声聞き取りにくく、歌い手が不在である。新島村ではこれを現在、歌復元の専門家に依頼して歌えるような対策を検討している。

本村大踊保存会は、かつての勢いがなくなり、毎年盆の公開時になると教育委員会・新島村博物館スタッフは踊り手の調整で四苦八苦している。若い担い手の都立新島高校の生徒たちが、大踊の練習に打ち込み、盆の公開時に踊り手として参加している。

本村の保存会組織は新たな会長のもと、平成24年5月より活動を開始している。

本村の大踊は明治から昭和初期に長栄寺境内で行われた消防団が取り仕切る厳かな儀式がほぼそのままの型で残っていて、貴重であるが、その儀式も消防団活動が多忙な状況にある今日、継承が危うくなっている。上に記した大踊の経緯を鑑みながら、ぜひ島の重要な民俗芸能を保存継承して行きたい。

大踊の伝承は時代的な背景によって消えたり復活したりを繰り返して来た。今その保存継承は極めて難しい状況にさしかかっている。博物館の古民家では毎月、島の若い主婦層が中心になって「大踊研究」が行われている。歌と踊りの師匠は若郷から古民家まで足を運んでいる。大踊は男踊りであり、女の人たちは踊ってはいけないものだという決まりと認識があったが、もはやそんな悠長なことは言っていない。

民俗芸能学会の三隅治雄会長は「日本の民俗芸能を今支えているのは、女性たちの力である。女性たちに頼らなければ今の日本の芸能は成り立たない。」と述べられている。

若い世代へ後継を求める手段としては、高校生や中学生たちが踊りに興味を持たれていることは素晴らしいことと思う。地域全体で貴重な島の伝統文化を守り抜いて行きたい。消えてしまったら、それですべてがおしまいになってしまうからだ。消してしまうことは

簡単でも、掘り起すことは困難を生じる。大踊は今、新島にしかない民俗芸能である。この芸能を観覧した方々は言う。「実に素晴らしい。」「今まで見たことがない。」と……。毎年盆の到来とともに大踊の練習がはじまる。踊りや歌を歌いながら、大踊がどういう経緯で継承されてきたのか、継承には苦難のプロセスがあったに違いない。先代の方々が取り組まれた大踊について、歴史は明確ではないにせよ、場合によっては「座学」を設けて話しあったり、普段の練習段階からお互いに話しあいながら理解を深めて行くことが大事だと考える。今、確かに言えることは、新島は本村と若郷に大踊の歌と芸態がしっかりと残されていることである。両地区の歌や芸態が多少異なっていようとも、双方が謙虚に大踊を学びあい、違いについても認め合う姿勢が重要であると考え。違いを認め合いながら、経緯について研究して行くことが両地区の大踊継承にとってより重要な要素になるからだ。

私たちは故郷に伝わるこうした芸能をもう一度見直し、評価する努力を継続しなければならない。

#### 謝辞

- 本稿を作成するに当っては論文構成から細部まで磯部一洋氏（新島村博物館館外研究協力委員）から助言をいただいた。
- 本村及び若郷の大踊保存会の役員の方々からは論考する上で参考になる貴重な助言をいただいた。
- 前田ヤヨヒ氏には大踊の歌の解説について読み下していただいた。

以上の方々にお礼申し上げます。なお、前田氏はご高齢にも関わらず、平成23年12月まで徒歩で遠距離をご来館されましたが、現在ご健在である。

#### 付録

##### 資料1 参考文献に見る大踊

##### 大踊・若者仲間

明治から昭和にかけての大踊の推移を「民俗藝術」第二巻第六号に新島出身の前田金八郎氏が「伊豆新島の祝儀踊<sup>しゅうぎおど</sup>」として伝えている。

「踊りは若者仲間が出たが、明治39年に若者仲間が廃止されてから、私設消防組が引き継ぐことになった。すべて漁師たちである。踊りに必要な傘ぼうろく、鎌、笛、太鼓は消防組の頭の家<sup>かみ</sup>に保管していた。盆の祭りは島全体の儀式なので、学校を出た男はすべて何かしら役について働かなければならなかった。踊りに出ない者は、間に挟まる余興の踊り（小踊り）に出るとか、炊事をするとか、怠けて遊んでいることは許されなかった。」と記している

「若者仲間とは地域の中で団体の訓育に尽くしてきたものであり、規則を設けて組織的な団体活動をして来た。夜間出漁の打ち合わせ談合に効果があったという。本村は大正9年に青年団と改称している。また昭和4年に女子青年団が発足した。若郷は大正4年に、式根島は大正10年に青年団が設置されている。」(新島村史・式根島誌稿)

#### 踊りの練習

「稽古場と言っても、農家の庭で電灯の灯で踊るのだが、この時、笠は冠<sup>かぶ</sup>らない。

はじめの稽古が済むと一同で酒を飲み、神仏に灯明<sup>とうみょう</sup>をあげ神酒<sup>おみき</sup>を供え、子どもたちにお菓子を与えるので、これを「ケントクマツリ」と言う。あるいは「ケンゾクマツリ」とも言われている。八百萬<sup>やおろず</sup>の神々、三界萬靈<sup>さんがいばんれい</sup>の供養のためらしい。子どもにお菓子をやるのも供養のためらしい。踊り手は18歳、19歳くらいから出るが、年長では50歳過ぎの者も踊った。踊りはすべて男ばかりで女は出ない。

傘ぼうろくは、大きな傘に、俗にカバという鏡幕を傘のまわりに一帯に垂らし傘の柄には無数のものを結びつけてある。布地を細く切ったものや鏡、鈿<sup>はらみ</sup>、鈴、猿の形をした小さな人形、女の髪、そうした麻を巻きつけ、その一か所を白い紙で巻き、紙には寄進者の姓名を書きつける。時には年齢を書く者もいる。月日はあまり書かない。「自分の身体が丈夫になるようにとつける。若者が大勢で踊る。その若者の元気な息がかかると言われている。踊りの当日になると、傘ぼうろくを保管している組頭の家「これをカバにつけてください」とお布施を添えて希望者たちが持って来る。このお布施は当日の費用の中へ加えられる。布地の切れ端は毎年増える一方で、古い物は取ってしまうということもないので、年代の古い物は自然に腐って落ちてしまう。「家の者が弱いからカバに着いたものを欲しい」と希望があると、望みの品を抜いて渡すこともある。カバ、鏡幕<sup>かがみまく</sup>は奉納する者のあるたびに新しく取り替えるが、黄八丈の縞物<sup>しまもの</sup>もあった。白地を染め抜いて寄進者の氏名<sup>きしんしや</sup>を記す。頭の家で保管するときは柄<sup>え</sup>についたものだけはずし、カバはつけたまますぼめておく。鎌<sup>かま</sup>は藁<sup>わら</sup>で巻いたまま保管した。」

現在は、本村、若郷ともに公共のコミュニティー施設を使用して大踊の練習をしている。国の重要無形民俗文化財に指定されているため、新島消防団、教育委員会・新島村博物館のスタッフが保存会を支えている。

#### 踊り手の装束～本村

「紋服<sup>もんぷく</sup>(絹)の着流しに色のある房<sup>ひも</sup>の紐を帯留めのように結んで前に垂らし、白足袋

裸足で踊る。笠を冠る。手ぬぐいで鉢巻をし、その上に麻の紐を巻く。麻の紐は後頭部に垂れて下げ緒につなぎ、一番上を白い紙で巻く。下げ緒は8本のやや太い紐で黒い紐4本、茶色が4本であるが人によって8色の房を用いた。下げ緒の長さはその人の身長と同じ長さである

笠は妻折笠で、笠のふちは一面に無地中幅のちりめんの色は紫や浅黄のものを鏡膜として垂らし、カバと呼ぶ。踊り手の顔はこれで隠れてしまうが、カバを透かして隣の者の踊りを見て自分が遅れたり早すぎたりするのを調整できる。腰に印籠を下げ、手に扇子を持つ。音頭取りの二人に限りカバの下に下げ緒を白い紙で巻いて目印としている。

扇子の骨は11本、普通の形の扇子で一方は地紙の上端いっばいに黒い筋を引き、少し間をおいて赤い筋を引いた。これは消防団のマークで、下に一とか二とか書いた反対側には本村消防団と横に書く。一とか二は各分団の印で六組ある。」

### 踊り手の行列

「踊り衆は2列で傘ぼうろくを先頭にして、囃子方、音頭取り（踊り頭）踊り手の行列が続く。鎌を先頭に踊り頭、踊り手の行列が二つに分かれる。前者の音頭を「本音頭」と呼び最も重大な責任がある。後者の音頭を「つつきり音頭」と呼ぶ。本村は新町と原町に分かれていたので、この二つが毎年交代で「本音頭」を受け持った。

時刻になると寺本堂で小坊主が住職にお茶を捧げる。これを合図に世話役・見張りの者が「えらっしえい、えらっしえい」と掛け声をかける。すると笛と太鼓で囃子にかかる。太鼓は一人の太鼓持ちがいつも持って歩いた。囃子につれて一同練り込んで来る。

踊り手は扇子を半開きにして右に持って入って行く。境内に入ると二列の行列はそれぞれ半円形にまわって本堂の前で先頭の傘ぼうろくと鎌が落ち合う。大きな廓が出来ると傘ぼうろく、鎌、笛、太鼓各組の旗持ちは輪から離れ、高燈籠の下に来る。輪の中に6人、外に6人の見張りがつく。これはすべて消防の頭たちで二人の音頭を標準にいつも見張っている。音頭は下げ緒に目印の白い紙を巻いた。

音頭が一句歌い出すと、踊り手が続いて踊りは始める。踊りはすべて右へ右へとゆるやかにまわるので、右足から出るのもあり、左足から出るものもある。踊りの中休みに余興が入る。これが終わると伊勢踊りになる。その日の進行具合で伊勢踊りの前なり途中なり後なりに暮れ六つの鐘が撞かれる。その時に高燈籠に灯を入れる

伊勢踊りが終わると出て来た時と同じように輪の中に傘ぼうろく、鎌、囃子方が入る。各分団の旗を持った者は旗の代わりに提灯を持ち、三度広場を囃子につれてまわる。この時扇子は半開きにして右に持ち、本堂の前を過ぎる時はその扇子の表一番号の書いてある方を上に出す。本堂で見ている人たちへの礼儀である。三度目をまわり終えるとはじめのように二列になり、傘ぼうろく、その他は出て来た順と逆に最後に歩く。踊り手たちが橋にかかって石段まで来ると、女房たちが待っている。分団の提灯があり、自分の夫は自分の分団の何番目かははじめからわかっているので、女房たちは夫の笠に手をかけて脱がせる。踊り手が独身者であれば、その恋人が脱がせる。石段のそばには鳥の人が大勢集まって、独身者の笠を脱がせる女はだれかと興味深く期待して見る。時には笠を脱がせる女が

二、三人いて一度に飛び出して話の種になることもある。

笠を脱いだ踊り手たちは伊勢音頭を歌いながら、ゆっくりと戻って行く。」

#### 大踊の服装

今公開している服装は昔と変わらない。

#### 組頭（本団）

羽織に袴を着し、白足袋に白緒の麻草履をはく。

#### 張合衆（分団長）

羽織を着し、白足袋に白緒の麻草履をはく。

#### 本音頭・ツッキリ音頭

着流し角帯腰には印籠を下げて白足袋に白緒の麻草履をはく。

#### 世話役・中身張り・囃子方・道具持ち

くるわ内に入る者はひとり残らず着流し角帯腰には印籠を下げて白足袋はだし。

#### 大踊衆

絹織物の藍色の着流しに角帯を締め、帯の上に細い萌黄色の真田を巻き、腰に縮面の布を巻いて顔を覆い、絹の色糸にて猿子を結び、数か所に房のついたハッ打ちの下緒さげおを頭より背から足のかかとまで垂らす、白足袋はだしで踊る。本音頭は妻折笠へ竹の笹をつける。

#### 小踊衆

浴衣地に兵児帯、印籠代わりに竹の笹をつけて白足袋はだしで踊る。

上の装具を欠いては、くるわ内に入ることは禁ぜられている。

#### 資料2 大踊に関する補足

##### 公開されている大踊

##### 本村

「役所入踊」「お福の踊」「伊勢踊」（「長者踊」は役所入踊の一部）

##### 若郷

「青が丸」「備前踊」「伊勢踊」

両村ともに大踊の最後は「伊勢踊」で締めくくる。

##### 大踊歌本の意味について

##### 本村の大踊歌詞

##### ○役所入踊

しだり柳の はのつゆおりて 池になるまでナァおんみとそわバ  
おんミをもえバ かとふ坂を かしではだしでナァ いちやを

しのぶ

(意味)

しだれ柳の葉についた露が一滴一滴と落ちて 溜り溜まってそれが池になる程  
長い間あなたと添い遂げられたらいいですね あなたのことを一生懸命思いな  
がら関東坂を裸足のままで一晩中思い慕っていましたよ。

○長者踊

長者踊りや これまでも ひんやあ これまでも  
おどるよう おどりまでも

(意味)

長者踊りですよ 長者踊りを踊っているのですよ ほ～ら踊っていますよね

○お福の踊

式根のかまの船頭殿ハ 塩舟ニヨこいでヨウ新島へ渡る  
新島ハ名所でう漁所 ひんよう 新島は名所で漁所  
ひんよう 新島ハ名所漁所口

(意味)

式根島でつくっている塩の釜にかかわっている船頭さんは 塩舟こいで新島へ渡ります  
新島は魚がたくさん獲れるよいところです ひんよう 新島は魚がたくさん獲れるよい  
ところです。

○伊勢踊

こりゃなにおどる やアれこうりゃ こりゃなあにおどる  
イエサウリヤ おおいせの踊や やあれい これまでもエー

(意味)

これは何を踊っているのだろう ヤーレコーリヤ これは何を踊っているのでしょうか  
ヤーレあなたは伊勢踊りを踊っています

※以上の歌は毎年8月15日の大踊公開時に長栄寺境内で踊っている演目である。

若郷の大踊歌詞

○役所第七番 青が丸

は～い～ンヤッ 我が恋よ  
は～い～ンヤッ 我が恋よ  
は～い～ンヤッ 浜の松風 磯打つ浪よ  
ひんよう音には 聞けどうん  
音には聞けど 青がまねかぬ  
恋の踊りよ これまでも



(意味)

私の恋は 私の恋は ああー私の恋は いいかげんなものではありません 濃いもので  
す

浜の松風や磯打つ波は 音に聞く有名なものですが 青が丸が招いているのではありま  
せんか

恋の踊りはここまでです

○寺第四番 備前踊

は～い～ンヤッ 備前こかぎは一人姫 ひんよう 顔の ひんよう えくぼが有明の月

は～い～ンヤッ 備前踊を踊るよう ひんよう これまでも

(意味)

備前小かぎは一人娘です 顔のえくぼが明るくかわいい 備前踊りをおどりましょう

○伊勢踊

こうりゃなに踊り こうりゃなに踊り お伊勢の踊りをいじゃ踊る これから見れば

近江が見よる笠こてたもれ、近江笠 お伊勢の踊りよこれまでも

(植松本)

(意味)

これは何を踊っているのだろう こりゃ何を踊っているのだろう

あなたはお伊勢の踊りを踊っていますね

お伊勢の踊りだ あなたはお伊勢の踊りを踊っていますね

ここから見れば 近江が見える 笠を買ってください 近江笠を 近江の笠は何がよ  
いって締め緒が長くて かぶりやすいのです 今日買ってきます お伊勢の踊りですよ  
その踊りもここまでです ここまでです。

※以上の歌は8月14日の大踊公開時に、若郷妙蓮寺境内で踊っている演目である。

(大踊歌詞は前田ヤヨヒ氏に読み下しをお願いした)

参考文献

平成23年度新島村博物館年報 研究紀要「新島村の津波伝説および巨大女石の紹介と若干  
の検討」 磯部一洋

「新島村史通史編」

「式根島誌稿」

「伊豆七島風土細覧」(三島勘左衛門著)

「民俗藝術」第2巻第6号「伊豆新島の祝儀踊」前田金八郎

「民俗芸能現地習得報告書～新島の大踊」(日本民俗芸能協会)

大踊歌本(本村・若郷)

「新島大観」(前田長八著)